

富士砂防だより

FUJI SABO NEWS 第24号臨時増刊号

発行 建設省富士砂防工事事務所
富士宮市三園平1100
電話0544(27)5221

富士山砂防30周年記念式典・シンポジウム開催

富士山の昨日・今日・明日



—富士山を見つめ、学び、富士山を愛する人々と語る—

■目的

富士山でくり返されるさまざまな土砂移動から、安心して暮らせる地域をつくるのが砂防事業の直接の目的です。そして安心して暮らせる日本の経済活動と環境の中で、富士山という財産を活用し、美しい富士山を守りながら地域が豊かな将来を持つことが強く望まれています。富士山での直轄砂防事業は昭和44年度に着手し、翌昭和45年度に富士砂防工事事務所を開設しました。以来30年の節目を迎えます。本年度はこれまで直轄砂防事業として実施してきたことをふりかえり、色々な方面の方々から富士山への思いと当事務所への意見をいただきます。さらに、次年度は、今後の事業のあり方についてのご意見をいただきます。

みなさまの積極的なご参加をお願い致します。

■開催日時

平成11年11月17日(水)

「記念式典・シンポジウム」：静岡県富士宮市民文化会館

人数：1000名

入場料：無料

■プログラム

12:30 開場

13:00 開会(第一部式典)

挨拶・祝辞

13:40 事業経過報告 富士砂防工事事務所長

13:50 映像上映 「幸田文 崩れ 富士山大沢崩れ」(ハイビジョン映像)



14:00 特別講演 「崩れ」と様々なつながり 青木玉(幸田文のご息女)

14:50 (第二部シンポジウム)

テーマ「富士山の昨日・今日・明日」

●出演者

コーディネーター 池谷 浩 (建設省河川局砂防部長)

アシスタント 好本 恵 (元NHKアナウンサー)

パネリスト 今井通子 (医師・登山家)

山村レイ子 (エッセイスト・ラードライバー)

青木奈緒 (エッセイスト)

若林淳之 (静岡大学名誉教授)

水山高久 (京都大学教授)



青木玉



池谷 浩



今井通子



若林淳之



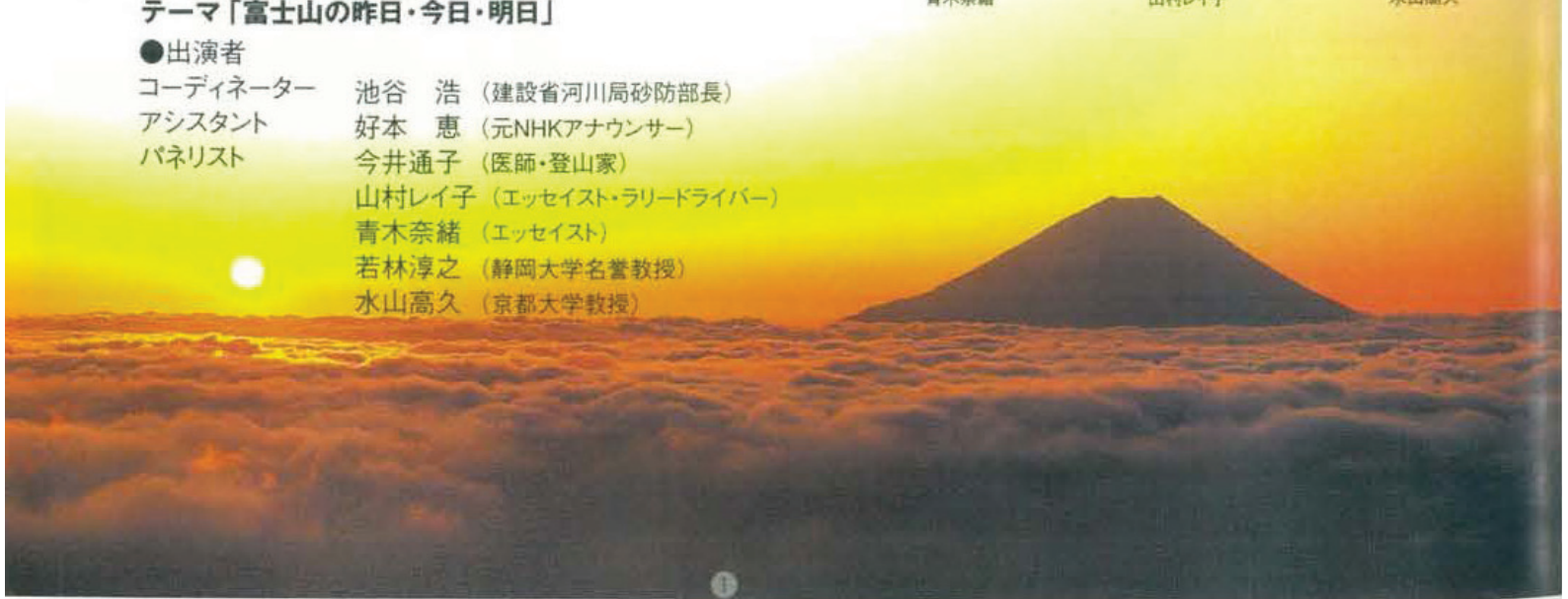
青木奈緒



山村レイ子



水山高久



崩れ

(幸田文学に見る富士の山)

昭和五十一年五月

作家 幸田文は偶然見た

静岡県安倍川源流の大谷崩れで

偉大な自然の営力に

深い感慨を覚え七十二歳にして

全国の大崩壊地を巡り

随筆「崩れ」を執筆した

同年七月 幸田文は

富士山の大沢崩れを訪れた

「富士山直轄砂防三十周年事業」で作家故幸田文(あや)さんの随筆「崩れ」(婦人之友に連載)をモチーフに大沢崩れをハイビジョンで撮影し、十二月十七日の記念シンポジウムで公開します。記念式典では幸田さんの長女で文筆活動などを続ける青木玉さんの記念講演も予定しています。

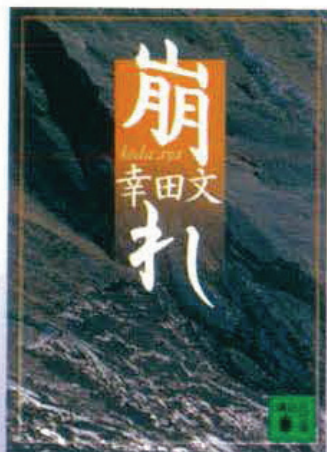
「崩れ」は幸田さんが七十二歳の時に全国の土砂崩壊地を訪ね歩いた記録で、制作する大沢崩れ映像には幸田さんの文章をナレーションとして織り交ぜながら、大沢崩れの実態を印象的な映像とモニタージユで紹介します。

日本一の高さと美しさを持つ霊峰富士。その富士山には八百八沢といわれるほど多くの沢があり、その西斜面に大崩壊「大沢崩れ」があります。「大沢崩れ」は、約千年前に崩れ始めたと言われ、今では頂上直下から始まる、長さ一二km、幅五〇〇m、深さ二五〇mの大崩壊となっています。

ハイビジョン「崩れ」の撮影は、幸田文先生が富士山を訪れた七月後半から九月下旬までの約二ヵ月、四回にわけて行われました。崩れる瞬間の迫力ある映像を撮るために、大沢崩れ沿いの道なき道を標高約三〇〇〇mまで登り、二日間にわたってねばり、撮影を行いました。また、山頂をはるか超える高さまでへ

リコプターで上がり、空撮が行われました。晴天の日をねらって日程を組んだものの山の天気は変わりやすく、現地では雲・雨に悩まされたり、撮影は大変でした。

ハイビジョンによる鮮明な映像と原文の朗読により、富士山大沢崩れの実態を皆さんにわかりやすく、印象的に紹介する予定です。



■作家 幸田 文と「崩れ」

偉大な自然の営力により形づくられる崩壊地にインスピレーションをかきたてられ、幸田露半を父とする作家幸田文は「崩壊」というこの国の背負っている宿命を語る感動を見て、聞いて、人に伝えることを願い、感動の伝達役をつとめた」と、全国の崩壊地を巡りました。

大谷崩れに次いで昭和五十一年七月、富士山大沢崩れを訪れています。

七十二歳の高齢にもかかわらず御中道を自ら歩き、お助け小屋から三ノ越に下り、我が目で大沢崩れを確かめ、大沢崩れとそこで発生する土石流を格闘高い筆致でみごとに表現しています。



ひと足早く紙上 上映



kōda aya

富士は霊峯であり、麗峯であるが、今日行くところは決して安泰、美景といえる場所ではなく、むかし富士信仰のお行者さんたちは、お中道大沢越えを石の滝とよんで、崩壊岩石の難をさけるために、必死の思いをした場所である。



林が切れた。見ると茶褐色をしたコークス様のものが、山の上から下へとこぼれ落ちていた。くさくさとした光沢はなく、人の肌にはなじまない感触。いつの昔かに富士山が噴火した岩石だろう。それが幾百年の星霜を過ぎるうち、さまざまな変化をうけ、いまこうして小粒に砕けて押し出されてきているのだろう。

板状の岩となにか脆そうに思える砂礫の層とが幾重にも重なっているのがよくわかる。富士山が何回も何回も噴火を繰り返して、その度に溶岩を吹き出し、砂礫を押し出した証だ。恐ろしいものである。事実、我々の足許から転がり出た石が、だんだんに友と連れて落ちていく様子が、姿なく音だけで知らされた。あれはやはり、破壊の音であり、恐怖の音響である。



崩壊とは、その最中はもとよりだろうが、崩壊前の姿も、崩壊後の姿も、なんと切なく胸にせまるものか。ここで目にしみたものが、もう一つある。木である。うすい地表の土に生長しているのが、けなげでいとおしかった。平安で肥沃な地域に茂る森林の青より、あす崩れるかもしれない薄土の上にある青を、私は感傷におぼれて眺めた。



●平成11年6月の青木奈緒さん



●昭和51年7月の幸田文さん



幸田さんと青木さん
あの日あの時
六月十日に、「崩れ」を書いた幸田文さんのお孫さんに当たる青木奈緒さんをお招きし、泊所・見晴台・源頭部調査工事現場に、花岡事務所長始め四名でご案内しました。その際、昭和五十二年七月に撮った幸田文さんと同じポーズで撮ったのが左の写真です。当時から見ると後ろにある三柱神社がかなり変わっています。当日は一時ガスが出ましたが、見晴らしも良く左岸側の崩壊の状況も確認できました。

富士山御中道「ぐるっと歩こう360度」 今井通子さんと学ぶ富士山の自然と植生



御中道・三柱神社22年振りに開く！

九月十一、十二日(土・日)富士山直轄砂防三十周年を記念して富士山御中道「ぐるっと歩こう360度」を講師に登山家の今井通子先生を招き、富士宮山岳会の協力を得て、実施しました。実行委員会が三回以上の登頂経験者から参加者を募集したところ、三倍近い応募がありました。「御中道」のルートは、崩壊や落石が激しい西斜面の「大沢崩れ」が一九七七年に閉鎖されてから一周できなくなっていました。特別に渡れるように施したもので、コースは富士宮口五合目を出発し、時計回りに、「天の浮橋」や「大沢崩れ」の難所を渡り、奥庭荘に二泊し、二日目は、須走口登山道を横切り、宝永山を通過して富士宮口五合目に戻りました。

出発時は霧が多く、雨も心配されましたが、次第に天候も良くなり、大沢崩れからは、山頂のドーム気象観測所も見えました。途中では踏み跡のない道が多く、密林や崩れやすい斜面に足を取られながら二百名が歩きました。一日のみの参加者や途中十二人のリタイアがありましたが、六十一人のスタッフを含む、百七十一人が無事踏破をはたしました。

また、歩きの中の企画として、各教室を実施しました。

・森林教室(林野庁静岡森林管理署 尾木治山課長)
・砂防教室(富士砂防工事事務所) 時田専門官



●富士山御中道一周踏破の証

- ・環境教室(環境庁南関東国立公園管理所) 中村技官
- ・植生教室(富士砂防工事事務所) 青山技官
- ・御中道教室(富士砂防工事事務所)
- ・火山教室(静岡県農業試験所) 宮地主任
- ・雪崩教室(建設基礎調査設計事務所) 安間博士
- ・火山教室(静岡大学) 小山助教



●雪崩教室

●富士山御中道

「ぐるっと歩こう360度」主旨
富士山の中腹を標高一、三〇〇から一、九〇〇の等高線に沿ってぐるりと周する道を「御中道」といいます。この小径を歩き、富士山の自然を学び、自然と親しむと共に、各溪流上流部の荒廃状況や森林の現状を認識し、砂防事業への理解を深めていただきます。



●三柱神社



●今井通子さんによる講話(奥庭荘にて)



●2日目の朝、いざ出発! 奥庭〜御庭遊歩道

富士山 御中道

写真で巡る
Panorama
Mt.Fuji



●植生教室(B斜面侵食フロント)



●大沢溪谷調査工事現場
提供: 読売新聞社



●大沢左岸を下る



●天の浮橋を降りて来たところ



●富士山表口五合目



●一周を達成し、踏破の証を受けとる参加者



●火山教室(御庭)



●宝永第一火口



●宝永火口(火山教室)



●宝永火口



●閉会式にて今井通子さんよりねぎらいのお言葉

注意: 今回は、記念行事として特別に踏査したもので、崩壊、落石が著しく、踏み跡のない区間も多く、通常は通行できません。

一つの山を二日で登るよりも、中腹部分に、世界の山々のいいところを持つている富士山。

実 は私、山だけではなく自然が大好きで、例えばバグライダーで空も飛びますし、キャンプでもトレッキングでもバイクでも、もちろん岩登りや冬山でも、みんな好きなんです。でも、最近ちょっと思うことがあるんです。日本の場合、山の上は確かにきれいなんです。ところが、中腹がきれいじゃないんです。山に登ろうと思うと、みんな過疎の村みたいなところからスタートして、登り始めようと思うと道路があつたりして、一番急なのは道路から山道に上がるところだったりするんです。あるいは、群馬県あたりには十一段のいい滝があるんですけど、その脇を道路が走つていたりするんですよ。そういうことを考えると、自分が山の上ばかり行つていたのは間違っていたんじゃないかと思うようになりました。いわゆる冒険心、探検心、探求心を満たすとか、自分の技術や能力が上がることに限しては、だれでもみんな興味を持つと思うんですけど、そればかりではなく、人間としてすべきことがあるのではないかと考えたのは、やはり中腹を愛するということか、尊敬するということです。そこに流れている水だったり、生えている木だったり花だったり、そういった自然の恩恵に敬意を表することが必要なのかなと。どうも日本の山屋さんは、「百名山に登りたい」なんて言うて上に登つてしまふけど、ちょっと違うかなと思うたりしています。

歩

きながら、スカンジナビア半島の最高峰のガルベゲン岬という山の雰囲気似ているなと思つたり、中部ヨーロッパのスロバキアあたりの、手入れをされたカラツツの原生林なんかと似ているなと思ひました。そのときも夕日がすごくきれいだったんですけど、今回も夕日がきれいでしたね。今日は、朝は霧でしたが、だんだん天気がよくなつて、最高でした。行きのいい人ばかりが来てるんじゃないかと思ひましたが、それにしても、中腹部分の、たつた半周の中に、世界の山々のいいところを持つている富士山というのは、やはり日本の霊山なんだなというふうに思ひました。

し

かし、今日私たちが歩いたのは、私たちの体力、気力、技術だけじゃないんです。あの沢山の山と、その階段の多さにはびつくりしましたが、あれを造つてくださった人たちの努力はすごいと思ひました。やっぱりこういうイベントでもない、こういう経験はできないんだと思つたら、ちょっとうれいような、悲しいような気がしました。

も

つと多くの人たちが自然の中に直接入つて、自然をよく見ることが大切だと思ひます。それから、自然の中で微力ながら人間が力を尽くしている部分も見ることがあるんです。皆さんは、あの沢山の山の大きなほらみたいななつていた部分を見ただけで、もしあれが崩壊したらどんな災害になるか、実感としておわかりです。最近では、都市に住んでいるだけで、上のことを全然知らないから、何かで水が来たり土石流が来たりと、どうしていいかわからないし、来そうなイメージさえ浮かばないような状況になつていくわけですね。今回は皆さん、沢山の山のあれを見ただけでも、自然の脅威を感じとり、災害の後のフォローとか、災害前の自分自身の身の処し方なんかを決めることができるようになつたことと思ひます。

途

中で見かけたシヤクナゲなんかにしても、よその山にあるシヤクナゲとちよつと違つて、先づが丸くて、花の白いシヤクナゲなんだそう。トリアカトなんか、白馬あたりのものと違つて小さなトリアカトがあつたりしました。あいつた自然の数々を見れば、心が洗われるし、自分の頭の中にあるパターンも変わつてくることと思ひます。都会にいて、「環境を保全しなければいけない」なんて言われても、「そんなこと言つたて、電気つけたほうが楽だし、朝だつてお湯がいいし」なんて、あまり環境に留意しようとかエネルギーの問題を考えようなんて考えないけれども、あいつうものを見ていると、やはり「この自然を大切にしなければ」と思ふんですよ。いわゆる市場経済社会の中で得られるものだけでなく、本心に心が豊かになるでしょうか。私なんか、ブランド品なんか買つたことないですけども、いつも心は豊かです。そういう思いができるのは、豊かな自然が残つていてくれるからこそなので、そういうことから自発的に環境保全について考えてくれるのではないかな、なんて思ひます。

さ

て、こでつだけ提案があるんです。皆さん山に行つたらお金を使つて下さい。ちなみに、けちなのはいいと思ふんですけど、山に行くときには、お金さえ持つていけば、山小屋でいゝなものを買つてくれるので、食べるものなんかは山小屋で買えばいいわけです。そうやってお金を使うことで、地元で山を保全している人たちが豊かになつて、山をもつときれいに、豊かにしてくれると思ふんですよ。

建

設省の方々には、直轄であろうが地元であろうが、行政としてやつていくからいいんですけれども、それでもこういうアイデアを実行するとなると、相当の人力、エネルギーを使つて今回のことをなさつたとおしやいました。花岡所長さん始め、工務事務所の皆さん、そしてそれにかかわつた皆さんに拍手をして、私の話を終わりたいと思ひます。

(奥庭荘での講話にて)

今井通子

御中道三六〇度めぐり総評

今回の御中道三六〇度めぐりに関しては本場に「結果よければすべてよし」ということで、言うことなしじゃないかなと思ひます。まずその「自然に大感謝。雨にも恵まれました。大風にも吹かれませんでした。雪にも恵まれました。これはもう、自然という私たちの神様が私たちを守つてくれたんだと思ひ、ただひたすら感謝の祈りを捧げる以外にはないと思ひます。それから皆さん、お一人一人、自身をほめてあげてください。『元気でつづいてきたぞ』。誰一人として生命にかかわるような事故を起こさなかつたという事は、本場に一人一人が慎重に行動したから、みんなが元気に戻れたんだと思ひます。途中でリタイヤした人も、自分の分を知つたからこすりタイヤしたんでしょから、それも含めて、みんなほめてあげたいと思ひます。

それから次に、六十名近くのスタッフの方々にも本場に感謝します。この方がいづしやらなかつたら、こんなことはできなかったと思ひます。中でも、先遣隊として、ラッセルをしてくださった方々、最後にザラ場がずつと続きまして、後から行くともう道ができていて、いい道を歩いているような感じがしたんです。実は雪山のラッセルと同じなんです。先遣隊の人たちは、つづつラッセルして、足場をつくり、道をつづつていってあげたんです。本言「苦労さまでした」。未来に向けてつづつて提案をさせていただいたのですが、これだけの経験をさせていただいたのに対して、新しい人々にも経験させてあげたいと思ひます。体力的にも大変だけれども、三十周年記念だけでなく、年に一回ぐらいは三六〇度の御中道めぐりをして、大沢山のみなさん、いろいろな富士山の自然を見て、全国への広報者になれるような後継者を育てたいと思ひます。『来年もやりましょう』。



今井通子 (いまい みちこ)
医師・登山家、山パ・ベルソール代表取締役社長、
プロ・大沢山登山会、東京都出身。1968
年東京女子医科大学卒業、1970年東京女子医
科大学山岳部に入部、1977年〜71年にかけて
女性として世界で初めてのマッターホルン、
アイガー・グランドジョラス等の欧州三大名
峰を完登した。1989年に至るまで、デュ
ランマを踏破し、チヨ・オウ、キリマンジャ
ロ等の登山に成功する。現在、建設省の河
川審議会専門委員、富士山大沢山研究会メ
ンバーなどに就任。「私の北見」(朝日新聞社)
はか著書多数。

富士砂防ニュース

S A B O N E W S

NEWS

大沢扇状地クイズウォーク
160人が5キロを歩く

「大沢扇状地クイズウォーク」を八月二十三日、大沢扇状地遊砂地を中心に実施しました。県下から参加した小学生から一般までの約百六十人が富士山大沢川の第五床固工からスタートし、クイズに答えながら、約五キロのコースを遊砂地の広さを感じながら高原の爽やかな風を満喫しました。

大量の土砂がたい積している大沢扇状地の広大な河原や樹林帯の中を、「大沢崩れはどのように崩れているか」など、砂防や富士山の自然に関するクイズを解きながら歩き、砂防についての理解を深めるもので、今年で五回目です。

途中、バックホーやダンプなど重機の操作体験のデモンストレーションや測量機械の体験を行ったほか、第九床固工でのマルチビジョンのビデオを見ながら砂防事業について説明しました。午後からは樹林帯を抜け、スーパー堤防で千分の一のミニ富士山の頂上で記念撮影を行い、ゴールの第五床固工にたどりつきました。

第五床固工ではクイズの答えを解説。扇状地の広さを知ってもらうためにフリスビーの遠投や的入れ、ペットボトル・ロケットの打ち上げ、ジェット風船飛ばしを行いました。

NEWS

キャンプ砂防in
富士山・狩野川を実施

富士砂防工事事務所と沼津工事事務所は共催で八月十八日(水)～八月二十七日(金)の十日間、高知大学、静岡大学、東京農業大学、京都府立大学から計五名(うち女性三名)の参加者により、「キャンプ砂防in富士山・狩野川」を実施しました。

「キャンプ砂防」は、大学で砂防を学ぶ学生等を対象として、砂防事業の意義と中山間地域及びそこに生活する人々に対して果たす砂防事業の役割を、地元の人々との共同作業や生活を通じて体験的に学び、砂防に対する認識を深めることを目的とし、全国の砂防事務所で開催されています。



学生達は、富士山、狩野川の各現場で砂防工事現場での作業体験、狩野川砂防の実態、富士開拓農家での酪農体験、御中道フジザミの水まき、植生を用いた溪流教室(清水宏博士の集中講義)、ぐるっと三六〇度のルート工作等盛りだくさんの体験学習を行いました。

NEWS

富士山大沢崩れと御中道
見学会を実施

御中道の林の中を歩く参加者

七月から十月の毎月一回「富士山大沢崩れと御中道見学会」を実施。参加者の多くは大沢崩れの現状と富士山の豊かな自然を肌で感じました。

この「富士山大沢崩れと御中道見学会」は、富士山の自然の豊かさや砂防事業の必要性を認識していただくことを目的として、平成元年度から計三〇回実施されています。現在までの延べ参加者数は一千名のほりです。平成七年度から年四回実施され、直轄砂防三十周年の今年度は一回につき三十五名の参加者を抽選し実施しました。

第4回富士山への手紙・絵コンクール 表彰式・講演会

平成11年12月5日(日) 午後1時30分～4時
富士宮市民文化会館(大ホール)
富士宮市宮町14-2 TEL 0544(23)1237

入場 無料



プログラム

- 13時00 開場
- 13時30 開演
- 主催者あいさつ(富士宮市長)
- 13時40 富士山への手紙・絵コンクール表彰式
- 手紙の部
- 絵の部
- 14時30 最優秀手紙作品朗読
- 14時35 スライド上映
- 14時45 最優秀手紙作品朗読
- 14時50 村松友視先生による講評
- 15時00 ゲージツ家 篠原勝之さんによる講演
- 16時00 閉会

富士山の絵 展示

●期間
平成11年12月1日(水)～5日(日)
●展示時間
午後1時～4時
●会場
富士宮市民文化会館(ホール及び展示室)

●主催
富士宮市、富士宮市教育委員会、建設省富士砂防工事事務所
(社)富士宮青年会議所
●協賛
(社)中部建設協会、静岡県東部地区内郵便局、
富士宮ロータリークラブ



村松 友視(むらまつ ともみ)

作家。1940年東京生まれ。幼少期から静岡高校卒業まで静岡県清水市に在住。慶応義塾大学文学部哲学科卒。後に中央公論社に入社。編集に携わる傍ら小説を書き始める。現在は東京都武蔵野市に在住。

■主な受賞歴
「時代屋の女房」にて第87回直木賞受賞(1982年)
「鎌倉のおばさん」にて第25回泉鏡花文学賞受賞(1997年10月)

■主な著書
「時代屋の女房」(角川書店)
「アブサン物語」(河出書房新社)

「鎌倉のおばさん」(新潮社)

「駿河ヒール物語」(たけじんはいいたと) (静岡新聞社)



篠原 勝之(しのはら かつゆき)

ゲージツ家。1942年札幌生まれ。絵本、絵画、舞台美術、小説と各方面で注目を集めるが、1986年、「鉄」という物質と出会い、以後精力的に鉄の作品を作り続ける。火、水、風、土といった自然のモチーフを作品のベースに置き、土地のエネルギーに対応したダイナミックな造形を生み出す。近年は「光を宿す鉄」としてガラスの作品を創りはじめた。

■主な作品
オブジェ「天の鳥船」(1989年/広島県大崎上島)

オブジェ「風弦」(1994年/山梨県武川村)

オブジェ「つづろ」(1996年/高知県中村市)

■主な著書
「クマさんのゲージツ日記」(毎日新聞社)

「鉄のおもいで」(講談社)